

## 御幸町山車及び二代原舟月作人形「関羽・周倉」附 人形銘札一枚



御幸町山車

平成28年12月1日(日本時間) 世界の伝統文化などを保護するユネスコの無形文化遺産に、山車が登場する全国33の祭り「山・鉾・屋台行事」が登録されることが決まりました。県内では秩父、川越の行事が含まれており、山車や屋台によって華やかに彩られる祭りが、今注目を集めています。

江戸では、日枝神社の山王祭や神田明神の神田祭が「天下祭」として知られ、祭りの隆盛とともに、山車や山車人形が豪華さ、絢爛さを競うようになりました。

所沢の秋の風物詩である「ところざわまつり」も、そんな江戸文化を伝える行事のひとつです。参加する12基の山車のうち、元町本町、有楽町、御幸町の3基は市指定有形民俗文化財となっています。

このうち、御幸町の山車は、屋根破風板の墨書から明治6年(1873)の作であることが判明しますが、江戸時代後期の人形師、二代原舟月が製作した「関羽・周倉」の山車人形が付属しており、5年に一度だけその華麗で勇壮な姿が披露されます。

この2体は、昭和44年に初めて文化財に指定された当時は、『三国志演義』の「桃園の誓い」で有名な関羽と張飛だと考えられていました。また、製作者も二代原舟月ではなく、その息子で幕末から明治にかけて活躍した三代原舟月とされていました。

しかし、改めて実施された調査によって、製作者は三代原舟月の父の二代原舟月であり、また、かつて張飛と考えられてきた人形も、関羽の従者の周倉と判断され、指定名称等が変更されました。堂々と

座す関羽の背後で、周倉は関羽の武器である青龍偃月刀を捧げ、控えています。こうした組み合わせは、江戸や川越の山車でみられてきたものです。

山車人形は、祭礼の際に曳き回されることが多く破損しやすい資料です。そのため後世に何らかの修理が施されている場合もあります。しかし、この人形は曳き回された機会が少なく、人形の命ともいえる頭部がほぼ製作当時の状態を保っています。しか



御幸町山車人形・関羽(左)と周倉(右)

も、江戸の名工二代原舟月の極めて少ない現存作品として、江戸文化を語る上で第一級の資料と位置づけられる文化財なのです。

今後もこの山車人形を長く伝えていくため、所有者である御幸町町内会の協力を得て、本年度修理事業が実施されました。今回の「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産への登録は、こうした行事が、世代を越えて受け継がれるものであること、また受け継ぐ人々に誇りや芸術的創造性を与えるものであること等が評価された結果です。まちが継承してきた伝統への思い。御幸町をはじめとする山車や山車人形は、そんな地域の人々の心意気を象徴する文化財なのです。

### 参考資料

是澤博昭「所沢市山車人形報告」(2015) 同『江戸の人形文化と名工原舟月』展図録(とちぎ蔵の街美術館、2005)、同『決定版日本の雛人形』(淡交社、2013)

# 御幸町山車及び二代原舟月作人形「関羽・周倉」 附 人形銘札一枚 二代原舟月作山車人形修理事業（概要）

所有者：御幸町町内会

修理施工者：有限会社古文化財保存修復研究所

山車人形「関羽・周倉」については、頭部の保存状態はおおむね良好であるが、手足部及び胴部等に深刻な欠損等がみられ、早急な保存対策が望まれていた。このほど、平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金の交付を受け、下記内

容の修理事業が実現した。

修理に際しては、過去の調査を参考とし、修理後に文化財の価値に変容が生じないように、指定者である所沢市と協議の上、慎重に実施することとした。



関羽：施工前

関羽：施工前

関羽：施工前

周倉：施工前

周倉：施工前

周倉：施工前

## 修繕方針と仕様

現状の彩色（下地層を含む）の維持を行い、脆弱な部分を強化することで損傷の進行を食い止めることに主眼をおく。欠損や割損（ひび割れ）などの著しい損傷が及ぶ部分のみ、補修と塗り直しを施すこととし、過度な全面塗り替えなどは行わない。また、補修箇所の彩色は経年により変化した現状の色味を損なうことのないよう慎重に行う。なお、衣装・持物については今回は修理を実施しない。

### 二体共通

全体の清掃を行う。

左右の指先等の彩色を剥落止めし補彩する。

浮き上がった表面の彩色層の剥落止めを行う。剥落止め処置の後、損傷部に胡粉を充填し補修する。補修部分には補彩を施す。

胴部の表面が剥落しむきだしの状態であるため、新たに和紙を張り渋皮を塗って強化する。

### 関羽

右側頭頂部から耳にかけて髪の子の部位の胡粉層が欠損し、墨を塗った紙で補われている。後補の紙を除去した後に剥落止めを行い、胡粉の充填・補修、毛筋目彫、補彩（墨）を行う。

眉毛、髭が脱落している部分は植毛をし直す。

右手第二指は過去の補修で目違いを起こしているため、一度取り外した後再接合し補修し直す。

右足は足首付け根から欠落しており、紐でとめている。右足首付け根の損傷部分を取り外し、再接合の後、補修部分を塑形材で充填整形する。左右の足先（沓）の彩色は剥落止めし損傷部分を補う。

椅子の地付き部分・損傷部を補修する。

### 周倉

額・上部の変色した彩色部分は剥落止めを行い補彩する。

眉毛、髭が脱落している部分は植毛をし直す。

頭巾の飾りを補修する。

右手は手首付け根部分を欠損している。手先を前腕部から取り外し再接合の後、矧ぎ目を塑形材で充填整形する。胡粉下地を施し補彩を行う。

左手手首の損傷部分の補修を行う。損傷部の塑形補修、補彩を施す。

剥落した両足の沓底の彩色（黒漆）下地を剥落止めし補修する。



平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金  
（文化遺産を活かした地域活性化事業）



胴は、両側面材に、前面・背面部とも格子状に小割材(横)竹材(縦)を組み付け、和紙を複数回貼り重ねて柿渋を塗り強化されている。施工前の状態では表面の和紙は失われていた。周倉の胴については解体し、接着剤や針金等による近年の補修を除去した。釘の錆でひび割れを起こしている竹材は交換した。再組立時には当初の用材であるラフィア(ヤシ科の植物繊維)を使用した。



セロテープによる補修を除去し、変色部分を手当てした。



周倉の頭巾の飾りの欠損部を別材で彫り足した(左:施工前、右:施工中)。



人形の構造を調査した結果、本来の形とは異なる方法で関節部などの部材が接合されていることが判明した。古写真(右下)からも当初の様子が確認できたため、手足の形状については当初の姿に復原することとなった。



関羽(左:従来形、右:復原した形)  
 ・右腕は胸前で経巻を持つ。  
 ・左腕の掌は正面に突き出す。



周倉(左:従来形、右:復原した形)  
 ・右腕の曲がりはやや内向きとなる。  
 ・左腕を伸ばす方向は下向きになる。

手先のひびなどには剥落止めを塗布した。



破損した周倉右手先に整形材を充填する。



(部分)

撮影年:大正6年  
 (加藤衛弘氏所蔵写真)



# 二代原舟月作山車人形「関羽・周倉」衣装調査報告(抄)

## 関羽上衣(緑地龍・瑞雲に蓬萊山文様綴織)



胸と背に大柄な龍が泳ぎ瑞雲がたなびく。腰から裾にかけては蓬萊山文が織られている。綴織とは平織の変化組織で、文様部分の緯糸と地の緯糸が別々に織り出される。そのため、隣り合う2色の境界では左右の緯糸が折り返され、経糸にそって把釣孔ができる。文様は綴織の特長を生かした大柄で明快な図柄に仕上がっている。



上衣の仕立て方は、左右の脇にマチを入れ、文様が繋がるように配慮されている。

◀把釣孔

## 関羽左腕(茶地六角花文に花蔓文様繡珍)



繡子組織の地合いに多色の絵緯糸を用いて花文や花蔓文様を織り出している。茶の織糸を染める時に鉄媒染を使用したと思われる。糸に劣化がみられる。

繡珍とは、繡子織の一種で地糸の他に種々の色糸を用い、文様が浮き出るように織った織物。

## 関羽右腕(黄地龍に瑞雲文様繡珍)



繡子組織の地合いに多色の絵緯糸を用いて、宝珠と龍が織り出されている。平金糸\*の劣化や繡子組織の傷みがみられる。

\*和紙に金箔を貼りカットして作った糸

## 関羽脚(緑地立涌に龍の丸文様銀襦)



緑地に平銀糸により、大柄な立涌文を配し、龍の丸文が立涌の中央に織られている。平銀糸の褪色や縫糸のほつれがある。



## 周倉上衣(紺地双龍丸文に牡丹唐草文様繡珍)



繡子組織の地合いに多色の絵緯糸を用いて、大紋のように大柄な2匹の龍が宝珠を挟んで向かい合い、七宝文や瑞雲がこれを囲むように配されている。さらに蔓の太い牡丹唐草文が添うように織られている。

形態は、貫頭衣風の上衣に鎧の草摺風の腰飾りを縫い付けている。黄地小花唐草文様紋織布により襟を付けた

り、袖・腰飾りには襷を入れた縁飾りを付けて装飾的である。この上衣の腰上の裏生地は、に使用された麻地に類似する。

## 周倉腕(紺地鳳凰・菊の丸文に花菱文様紋織)



紺地の綾組織の地合いに多色の絵緯糸を用いて、鳳凰の丸文と菊の丸文を段替りに配し、周囲を花菱文で埋めるように織り出されている。平銀糸や絵緯糸の傷みがある。

## 周倉脚(茶地花入亀甲、草蔓、梅、鶴文様繡珍)



繡子組織の地合いに多色の絵緯糸を用いて、花入亀甲と草蔓と梅と鶴の文様を段ごとに織り出している。文様のくり返しの中にも段ごとに絵緯糸の色を変えていることにより、図柄に変化を与えている。と同様に、茶の織糸を染める時に鉄媒染を使用したと思われる。織糸に劣化がみられる。

近年改めて山車と共に人形の文化財的価値の高さが認められた。今回の調査で人形の衣装類については、人形の頭や胴体とほぼ同時代の作で一体であった可能性が高いことがわかった。衣装類についても保存し、山車と共に人形も町の皆様に未長く親しまれ受け継がれていくことを念願する。

調査所見：

水上嘉代子(公益財団法人遠山記念館学芸員)